Japan Swine Farm Business Cooperation

TONJIKYO

ゆめ通信

2017.1.1. No.90

発　行　日本養豚事業協同組合
〒104-0033　東京都中央区新川2-1-10
八重洲早川第2ビル6階
TEL.03-6262-8990　FAX.03-6262-8991

新年のご挨拶

日本養豚事業協同組合
理事長　**松村　昌雄**

明けましておめでとうございます。

昨年の総会に於いて15年と長期に亘り組合運営に尽力された稲吉弘之氏から後を託され１年間頑張ってきました。多くの皆様に支えられ無事新年を迎えることが出来、心より感謝申し上げます。

昨年は熊本・大分両県での大地震や、北海道での大雨洪水により大変な思いをされた会員が沢山おられましたが、支部セミナーで皆さんの力強い元気な姿に接し安堵いたしました。しかしながら、これからは自然災害だけではなく、有事に対する備えも必要であることを忘れてはいけません。

猛威を振るっていたPEDは少し落ち着いてきたようですが、油断することなく地域的な撲滅の取り組みは必要と思います。

TPP交渉は、いつ発効するのか不透明な状況になってきました。米国主導の下に進められてきた政策であるにも拘らず、大統領選ではどの候補者もTPPには反対を公約に掲げ、最も過激な発言をしていたトランプ次期大統領候補が１月20日就任当日に離脱を表明すると明言しています。日本はというと、2012年の総選挙で自民党が「TPP断固反対～ぶれない」と公約し与党となったにも拘らずTPP推進へと豹変しました。両国共通の「豹変」とは何なのか。グローバル化を加速した方が国益に繋がるのか。今は誰も正確な答えはわからないと思います。なぜなら過去においてこのようなグローバル経済状況を体験したことが無いからです。こうすれば道は拓けるという「予測」ではなく「願望」にすぎず、今日本はグローバル化に突き進みつつある状況でしょう。一方、米国は過剰なグローバル化は米国の国益にならないと判断し、TPPから離脱の道を選ぼうとしているのではないでしょうか。世界単一市場化が絶対善という風潮から終わりの時が来るのか、EUでさえ「ヨーロッパ合衆国」という当初の理念を失い、離脱国、離脱を進めている国も出てきています。今、日本はどういう方向へ進もうとしているのか。「五里霧中」という状況にあり、しばし足を止めて霧が晴れるのを待つべきと思います。「走り出して止められない」そんな事に巻き込まれたらたまったものではありません。しかし、グローバル化は今後も止まらないでしょう。これからも豚事協は“良い豚”“良い餌”“良い管理”を実践し、規制緩和を求め、コストを削減し、勝ち残れる経営を第一に、活動を進めていくことが大事であると思います。幸いにも前期は入会者が退会者を上回っています。全国７支部で行われたセミナー参加者は若い後継者が目立っていました。今年も若手経営者育成塾、７支部でのセミナーなど進めていくことになります。

世界の穀物在庫は高水準にあり、“円安不安”はありますが飼料の高騰は考えにくく、しばらくは大きな価格変動はないと考えます。しかし、４年近く続く高豚価にあまり期待してばかりはいられません。今年も“良い豚”“良い餌”“良い管理”を皆様と共に追及して、組合運営にあたる所存ですので皆様方のご協力をよろしくお願いいたします。

沖縄養豚再生プロジェクト検証会開催

専務理事　矢嶋　隆次

●沖縄養豚再生プロジェクトの立ち上げ

沖縄県畜産課発表による肉用子豚を生産する母豚の頭数は、平成22年が２万3681頭、25年が２万3608頭とほぼ横ばいで推移。しかし、と畜頭数は平成22年の36万5000頭から25年には33万3000頭に約９％も減少。即ち母豚１頭当たりの年間肉豚出荷頭数が平成22年の15.4頭から25年には14.1頭（全国平均18.5頭）と大幅に減少。養豚県として名を馳せた沖縄の養豚が衰退しつつあることに危機感を抱き、平成26年10月、稲吉理事長（当時）と現場を見聞した。現実には新聞記事どころではない状態が沖縄県全体に広がっていることを目の当たりにし、驚くと同時に、対策を立てなければ沖縄の養豚が沈んでしまうと感じた。豚事協の組合員を集中的に巡回してみたが、状態は惨憺たるもので、稲吉理事長の危機感は深まるばかりだった。

PRRSを中心とした疾病の蔓延により離乳後事故率が10～50％と危機的状況にあること知った。これに対応すべく理事会、第14回総会に諮り、この対応策として優秀な養豚コンサルタントを紹介し、費用の一部を負担し再生に取り組む事とした。

●この事業と取り組んだ嘉数ファームの結果（優秀な養豚コンサル獣医師の指導は養豚家の人生を変える）

昨年11月28日、事業に取り組み約２年を経過した嘉数ファームを、コンサルタントを依頼した㈲サミットベテリナリーサービスの石川弘道獣医師と稲吉顧問とともに訪問した。現場を見てあまりの変化に驚いた。優秀なコンサルトタント獣医師の指導を仰ぎ、その指導の下に改善策を実践すればこうも様変わりに良くなるものかと！

具体的改善策は、子取り生産に特化・ピッグフローの改善・種豚の一部入れ替え・徹底的な衛生対策などである。これによって離乳後事故率が15％から２％に減少、離乳頭数が9.0から9.5に改善、豚が太くなり病気がなくなった。簡単に言うと子豚と豚舎の壁面天井が驚くほどきれいになっていた。豚舎の中で咳は聞こえなくなっており、二年前の子豚の健康状態とは雲泥の差であった。

●養豚コンサル獣医師によるコンサルタントを普及すべく若者を集め検証会を開催

同日那覇市のホテルロコアナハにて豚事協沖縄支部会員の若手経営者９人が稲吉顧問・我那覇理事・石川獣医師を迎えて、沖縄養豚再生プロジェクトの経過報告を兼ねて検証会を開催した。開催の目的は昨年２月の総会において可決され推進してきた沖縄養豚再生プロジェクトの成果確認と参加者への認知におかれた。

稲吉顧問より『当初は数名の参加を見込んでいたが、結果的に嘉数ファームのみの参加となってしまったのは残念だったが、石川先生の指導と嘉数雅人氏の努力により、開始当初からみると子豚の成績や畜舎管理が格段に改善されてきていることはとても喜ばしいことである。子豚が死ななくなったことにより従業員の管理意識も改善され、農場全体の雰囲気も明るくなっている』との講評の後、「10年後の日本の養豚の姿」と題した講演で、養豚業界の置かれている立場、米韓ＦＴＡの結果、世界の肉豚の生産コスト比較、日本の人口構成構造変化からみての豚肉消費の見通し等についての顧問の考えを話され、より一層のコスト削減の必要性と沖縄の養豚家の危機意識を高めることの重要性を強調された。顧問の講演は当初30分程度の予定であったが、豚肉文化の故郷である沖縄の養豚がこのままでは無くなってしまうとの強い思い入れと、聴講者の皆さんが熱心に聞かれていたことから力が入り、講演は一時間に及んだ。

●嘉数氏の感想

その後嘉数氏より約２年間の取り組みに対する報告がなされた。嘉数氏は稲吉顧問から『これじゃ駄目だ、このままじゃ潰れる』と言われたときはショックで、同時にとても悔しかった。しかし稲吉顧問

のきつい言葉がなかったらこの取組みにも参加せず、経営が破たんしていたと思う。稲吉顧問や石川先生には、とても感謝している。又、当初はその力量を疑っていたのですが、石川先生の指導は私の養豚人生を変えてくれました。との発言の後、まだ“成績が良い農場となった”と自慢できる状態ではないものの、石川先生の指導により、改善の歩みは着々と進んでおり、自分の農場の成績改善が着々と進んでいることが実感できる。繁殖部門の疾病を抑えるため、肉豚の生産をやめ琉球飼料に購入してもらっている。肉豚がいないことによる感染疾病の軽減は確実に進んでいる。将来は琉球飼料の預託も含めた、グループでの生産性改善を進め、沖縄の養豚の中での地位を固めたい。との意志が表明された。

●石川獣医師の講和

その後石川獣医師の講評がなされ、“話したいことは全て顧問が話してしまったので話すことはなくなりました”と言いながらも、嘉数氏の思い切った決断により、まだまだ途上ではあるが成績改善がなされていること、サミットベテリナリーサービスのベンチマーキングにも参加することとなったことなどが報告された。自分の農場の立ち位置を知り経営改善につなげるのがベンチマーキングだとわかっていても、成績が一段低い時は参加するのをためらう人は多い。嘉数氏にベンチマーキングにも参加するだけの自信が出てきたものと思われ、たった一人で始まった沖縄養豚再生プロジェクトだが他の面々も、早く意識を改革して嘉数氏の後に続いてもらいたいと思うと話された。

●今後の対応　～一粒の種がまかれ芽を出した～

このセミナーに参加した養豚家でグループを結成、石川獣医師のコンサルタントを受けると共にベンチマーキングにも参加し、お互いの経営改善を図ろうとの提案がなされた。

沖縄の組合員は現在30名。すべてが危機的な成績とは思えないが、沖縄県全体の母豚数は２万5170頭（28年10月現在）で、と畜頭数が30万4000頭（平成27年度）との統計から推定して、母豚１頭当りの肉豚出荷頭数は12頭程度となり、沖縄県全体の成績が危機的な状況は相変わらず続いていると言わざるを得ません。沖縄は、飼料原料をはじめとして養豚に係る資材は全て本土から見ると高くなってしまいます。これを考えると成績はどうしても本土以上でなければ利益を上げられないと思います。せめて豚事協の組合員は全国平均（母豚１頭当りの肉豚出荷頭数は19頭頭程度）以上にはなってほしいものだと思います。この嘉数ファームの成績改善を参考にして組合員の皆さんも利益を上げられるよう頑張ってほしいものです。

沖縄養豚再生プロジェクトは前期でとりあえず終了しましたが、嘉数ファームの改善結果を見ると、優秀なコンサルタントから適切な指導を受けて農場を管理する人が本気になって管理に力を入れれば、目に見えて改善されてくることが証明されました。他の組合員も是非とも適切な指導を受けて、意識をしっかり持って自立できる経営を目指してほしいものだと思います。今回、嘉数ファームの成績改善には琉球飼料㈱が肉豚の飼育を買って出たことにより、分娩から子豚までの飼育管理が単純にできたことも奏功しているようです。飼料の製造からその他の資材の搬送まで、琉球飼料㈱には大変お世話になっていますが、琉球飼料㈱を中心として、豚事協の組合員が一体となった運営をしていくことも将来は重要になってくるのでしょう。

沖縄の組合員が一丸となって全体で自立した経営を行っていくにはどうしたらよいか考える時期が来ていると思います。

Topigs 研究会開催

平成28年10月25日（金）AP浜松町会議室にて第16期Topigs研究会が開催されました。会場の都合から総参加人数は40名のつもりでしたが、最終的に45名の参加となり、参加された皆様には窮屈な思いをさせてしまい申し訳ありませんでした。

講師は㈲細川農興 細川拓也氏、㈲ロッセ農場 河瀬亮輔氏、日の出物産㈱ 森川和徳氏、日本農産工業㈱ 高橋真之氏の４名で、最後に養豚コンサルタントの山本一郎獣医師を加えたパネルディスカッションを開催して終了となりました。現場で直接生産に携わっている方々が講師だったことから、細かい点での質問が多かったことやパネルディスカッションでの質問が多かったため、質疑応答の時間を制限せざるを得なくなってしまいまして、皆様にご迷惑をおかけしました。

細川拓也氏は「１母豚当り離乳子豚数32頭超達成の軌跡と今後の展望」と題して講演。稼動母豚数が150頭でありながら、4,329頭の肉豚を出荷（１母豚当り肉豚出荷頭数28.2頭、出荷枝肉重量2,190kg）しています。大鋸屑を利用した踏込養豚ながら枝肉kg当りのFC（4.48）も良く、枝肉kg当り飼料費も213.6円／kgと良好な数値を出しています。Topigs20の導入と深部注入カテーテルを利用した人工授精への変換、妊娠鑑定器による妊娠鑑定の精度向上、P2脂肪の測定と目視併用によるボディコンディションの調整、許容開始後の交配開始時間の変更、母豚の産歴構成の見直し、ミルキーウインフィーダーの導入による虚弱豚への対応など、各種のセミナーで学んだことを自分なりに取り入れてきた成果を披露されました。また、JASVのベンチマーキング「PigINFO」や各種のセミナーに参加することで、細川農興の管理の長所や短所を見つけ改善していくことができたとして、情報収集の重要性を強調されていました。ただ、将来を見据えると飼育規模を350～400頭の一貫として、豚舎も疾病に強いオールインオールアウトのできる構成にしたいとの希望を述べられていました。

河瀬氏は、ロッセ農場は農場の敷地面積からして年間50,000頭の肉豚出荷が限界であるとして、今の農場で50,000頭の肉豚を如何に少ない稼動母豚で達成するかが命題であると講演を開始。他の農場と異なり、インジーン契約による閉鎖群の種豚生産のため種豚更新は精液によるもののみとなっていることを前提として講演が進められました。ロッセ農場は2009年にTopigsの導入を開始、本格的にTopigs20への切り替えがはじまった2012年には2,000頭超の稼動母豚がいましたが、2015年には1,800頭余まで減少。母豚を14％（300頭）減少させながら50,000頭出荷を維持してきている。Topigs20の効果であることは当然だが、総産子数が多いのに離乳頭数が少なかったのを改善してきました。原因は初産豚の成績が安定してきたことによるものが大きいそうです。これはTopigs育成豚の育成マニュアルに従って育成豚をしっかり作ること、育成から稼動母豚に編入するとき馴致を丁寧にすることで、初産豚の成績が安定してきたことが大きく寄与しています。１腹当り離乳頭数の増加は初産豚（12.73→13.16）２産目（12.23→12.79）３産目（12.17→12.53）の若い産歴の豚が改善されており、これが４産目以降の母豚の成績改善につながっている、と若豚の育成時期の重要性を強調されていました。

森川氏はTopigs GP輸入豚の輸出国農場での疾病のモニタリング状況を披露されました。その条件としては先ず輸出国側で口蹄疫・豚コレラ・アフリカ豚コレラなどカナダで12、オランダで９つの疾病がないこと。生産農場で過去１年間オーエスキー病・TGE・トキソプラズマ・PRRS・AR・豚赤痢など、カナダでは15、オランダでは16の疾病がないことが条件となっている。またマイコプラズマ性肺炎もモニタリングし検出されていないことを確認しているとのこと。これからみると日本で最も綺麗な豚とされるSPF豚はトキソプラズマ・豚赤痢・オーエスキー病・マイコプラズマ性肺炎・ARなので、日本のSPF豚よりはきれいな豚が輸入されていることになります。日本国内に入ってからの疾病感染の方が余程問題と思われます。

高橋氏は『すべては育成豚の管理から始まる』と題して、栄養学の立場からTopigsの育成の重要性を説きました。特に初回種付けのターゲット（140～150kg、230～250日齢、P2脂肪12～14mm、２～３回目の発情）を外れて交配した場合の悪影響に関して、それ以下の場合、それ以上の場合に分けて説明。ターゲットを守ることの重要性を強調していました。育成豚のDGの理想的な推移やマニュアルにあるネットエネルギーの概念をグラフや絵を使ってわかりやすく説明するなど丁寧な講演でした。また、育成期の４ステージの飼料の栄養を紹介してはいましたが、農場の気候条件や疾病感染のレベルで豚の栄養要求は変わることを重要視、あくまでも自農場に適した管理で育成ターゲットに近づけるよう要請していました。しかし残念ながら栄養学からの育成へのアプローチはやはり難しいのでしょうか、理解できた人は少ないように思いました。

最後のパネルディスカッションでは、山本先生の“驚くほど進んでいるヨーロッパの育種”についての講演があった後、会員相互の質問とそれに対する回答とディスカッションがありましたが、質問者が多く時間が不足してしまいました。栗木貢男社長（㈲ロッセ農場）の司会が上手で、質問を引き出す手法が長けているのは流石と思いましたが、やはり時間不足は否めない事実でした。次回は開始時間を早めるか、講演時間を短めにしてパネルディスカッションに時間を割かなければと反省しています。（矢嶋）

Let's Cooking

第８回女性部セミナー・お料理教室で使用したレシピのご紹介です。

豚バラ肉ときのこの豚汁

●材料（４人分）：

豚バラ　150ｇ
しめじ　１パック
えのき　１パック
エリンギ　１パック
なめこ　１パック
大根おろし（よく絞る）100ｇ
青ネギ　２本
すだち　１ケ
二番出汁（鰹・昆布）　400cc
味噌　適量
酒　大さじ２
片栗粉　適量
豆板醤　小さじ２分の１

●作り方：

①豚バラ肉は一口大に切って片栗粉をまぶしておく。
②大根はおろして水気をよく切る。
③二番出汁に酒、きのこを入れ火が通るまで煮る。
④味噌を溶き入れてから豚肉を入れる。
⑤とろみがついたら大根おろしに豆板醤・すだちの皮のすりおろしを混ぜ、
⑥サッと汁にあわせる。
⑦最後に青ネギを散らしてすだちを添える。

九州支部・沖縄支部セミナー開催

熊本地震発生から半年が経過し未だ完全復興は出来ていませんが前向きに進みたいとの決意と、全国からの支援に感謝の意を表した実取孝祐支部長の開会の挨拶により平成28年10月14日熊本市のTKPネストホテルで九州支部セミナーが開始されました。

松村昌雄理事長より改めて震災のお見舞いが述べられ、お見舞いに伺った時は大変な思いを抱いたが本日少しですが回復の様子がみられほっとしたとの思いが語られた後、「TPP締結後の養豚業界における規制緩和の必要性について」と題して入口対策である配合飼料価格安定制度は出口対策である養豚経営安定対策（豚マルキン）の拡充によりその存続の意味合いがなくなることが詳細に説明されました。

「ベンチマーキングから見た経営成績」と題して国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構食農ビジネス推進センター（プロジェクトプランナー）獣医学博士・東京大学特任教授山根逸郎氏より①ベンチマーキングの考え方、②PigINFOの紹介、③事例紹介、④2020年の目標について図表を用いて分かり易く説明されました。特に、2020年の目標では過去のデータを基に分析された母豚１頭当たりの粗利益について、枝肉出荷重量・枝肉価格・飼料費・農場FCR等をシミュレーションしながら詳しく解説されました。

㈲ティーピーエフ代表取締役谷口昇氏より会社概要の説明と自己紹介がなされた後、「優秀事例から見た今後の養豚経営へのチャレンジ」と題したパネルディスカッションの基調講演が始まりました。Topigsは生産性が高く従来160頭以上の母豚を現在は135頭で同一の出荷頭数を維持しているとのことでした。分娩室・離乳室・子豚舎・肥育舎と順を追って長所・短所が説明され、課題として販売価格に大きな影響を及ぼす体重測定の必要性が説明されました。

パネルディスカッションは、コーディネーター㈲ロッセ農場代表取締役社長栗木貢男氏の司会で、質疑応答形式で行われました。飼料効率について参加者より自家配合経験談が語られ、糞尿処理の問題では５名の方の現状と問題点が語られ、さらに良い肉質・ブランド肉・定時定量出荷についての意見交換もあり盛り上がりを見せたパネルディスカッションとなりました。

平成28年11月25日沖縄県那覇市の共済会館八汐荘で行われた沖縄支部セミナーは金城栄支部長の挨拶により開始されました。

松村昌雄理事長の「TPP締結後の養豚業界における規制緩和の必要性について」と題しての講演に入り、豚事協として要望する規制改革として配合飼料価格安定基金の必要性及び養豚経営安定対策（豚マルキン）拡充を中心とした説明がなされました。

山根逸郎氏より「ベンチマーキングから見た経営成績」と題した講演でベンチマーキング、PigINFO、データの解析結果、結果の感受性分析について説明がなされ、データを読み込む重要性が解説されました。得意分野である遺伝特性に触れ、養豚における遺伝的能力は先進国に比較して大きく劣ることがグラフにより示されました。特に本セミナーでは生産性と肉質について、母豚１頭当たりの粗利益で比較した標準的な販売と付加価値販売とのシミュレーション結果に参加者も真剣に聞き入っていました。

谷口昇氏より「優秀事例から見た今後の養豚経営へのチャレンジ」と題した基調講演が始まりました。母豚の能力については踏ん張る力があり体力があることが必要との思いがあり、マニュアルはあくまで標準的な事であり母豚１頭１頭の特色をつかんだ対応が大切と力説されました。また、母豚は年々筋力が衰えるがTopigsは筋肉体質であり分娩後の戻りが早いとの感触を得ていることが披露されました。

パネルディスカッションは、コーディネーター栗木貢男氏の司会で、質疑応答形式で行われました。体重測定の必要性、良い肉とは、オガコ豚舎でのオールインオールアウト及び農場要求率、自前トラックのバイオセキュリティ等多様な質疑応答が若手を中心に議論され、賑やかなパネルディスカッションとなりました。（山田）

第16期海外視察研修に参加して

㈲山水園　坂本　翼

先日の第16期海外視察研修では大変お世話になりました。坂本（さかもと） 翼（つばさ）と申します。はじめに簡単な自己紹介をさせていただきたいと思います。

生年月日は1991年９月生まれで、年齢は25歳です。出身地は、栃木県の小山市というところで、県南部の中心都市です。幼いころは、母に買ってもらった動物図鑑を擦り切れるまで読んでいたほど、動物が好きでした。また、母方の祖母が、小規模ですが農家をしていたこともあり、農業にも関心がありました。そういったこともあり、高校は農業系高等学校へ、大学は農学部に進学しました。そして、大学４年の就職活動の際、「動物と農業の仕事といったら、畜産しかない！」と思い、畜産会社、それも養豚会社に絞って就職活動をしました。数ある畜産業の中から養豚業に絞った理由は、経済性が高く、まだまだ伸び代があると思ったからです。

2014年４月に阪神畜産㈱に入社し、繁殖部門である㈲山水園の北広島農場に配属され、現在もそこで働いています。来年の４月で勤続４年目になります。入社してからは、妊娠舎や交配舎の管理、分娩舎での治療および子豚処置、豚舎水洗の担当を経て、現在は主にAIと候補豚舎の管理をしています。

農場がある広島県北広島町は日本有数の豪雪地帯で、農場の近くにスキー場があるほどです。気温に関しては、夏は比較的涼しいのですが、冬になると、毎日のように氷点下を記録し、普段の業務に加えて、除雪作業をしなければいけません。北広島農場は繁殖専門農場で、離乳子豚は弊社の肥育農場の西城農場に出荷します。従業員数は14名（パート１名、中国人研修生２名を含む）です。母豚数は約3000頭でTopigs20、止め雄はTempoをつかっています。更新雌種豚は自家生産しており、更新率は約50％です。交配は100％ AIです。2015年度の実績としましては、離乳総数が約92,000頭、一母豚当たり離乳頭数は31.8頭でした。

８日間の研修でオランダとドイツに行き、Topigs Norsvinの本社とリサーチセンターや現地農場とユーロティア展示会などを視察しました。オランダでは、アニマルウェルフェアに関する事項が法律によって細かく定められていました。例えば、豚は分娩舎での管理と離乳後の数日間を除いて群飼しなければいけないこと、すべての豚房に豚が遊べる遊具を設置しなければならないなどです。また、オランダとドイツどちらでも見かけたのですが、盲導犬などではなくペットとして飼われている普通の犬が、店の中や駅の構内に出入りしていました。さらに、展示会でもストールフリーの分娩豚房が展示されていました。これらのことから、欧州でいかにアニマルウェルフェアが強く根付いているかを実感しました。

８日間の研修で強く感じたことは、欧州はいうまでもなく養豚先進国で、日本はまだまだ養豚後進国だということです。ユーロティア会場には様々な国旗が掲揚されていましたが、日本の国旗がなかったことも、これを示唆しているのだと思いました。正直に申しますと、とても悔しかったです。研修で学んだ弊社でも実現可能な欧州の養豚のいいところを取り入れ、日本も養豚先進国の仲間入りができるように、日本の養豚業界を盛り上げていけたら、と思いました。

前列左から２番目が筆者

㈲香川畜産が最優秀賞・農林水産大臣賞受賞

平成28年11月22日、（公社）中央畜産会主催の『平成28年度全国優良畜産経営管理技術発表会』が開催されました。

この発表会は農林水産祭参加行事の一環として毎年開催されるもので、最優秀賞・農林水産大臣賞に選ばれた事例が農林水産祭での選賞の候補事例となります。

今回は最優秀賞・農林水産大臣賞に養豚経営１戸、酪農経営２戸、肥育牛経営１戸が、優秀賞・生産局長賞に養豚経営１戸、酪農経営１戸、肥育牛経営２戸が選定され、豚事協の組合員である㈲香川畜産が、最優秀賞・農林水産大臣賞を受賞しました。（東野）

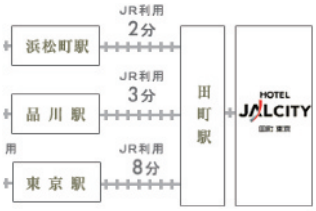
第16回通常総会開催のお知らせ

第16回通常総会を下記の要領にて開催致します。詳細は別途ご案内申し上げますので多くの組合員のご参加をお願い申し上げます。

開催日時　平成29年２月24日（金）　午後１時30分～
開催場所　ホテルJALシティ田町
　　住所：東京都港区芝浦３-16-18　TEL03-5444-0202
　　交通：JR田町駅芝浦口（東口）より　徒歩５分
議　　案：◆第16期事業報告、決算（案）の承認
　　◆定款変更決議
　　◆第17期事業計画案の承認
　　◆経費の賦課徴収方法の決定

なお、総会終了後基調講演（予定）、懇親会を行います。

アクセス方法：



編集後記

＊ ＊ ＊

茶道を体験して来ました。今まで京都に行った際「京都と言えば宇治の抹茶よね」と、旅行情報誌に感化されて抹茶を飲んだ事はありますが、本格的なのは初めてです。事前にyoutubeにてお作法の勉強。ふむふむ、お茶菓子を受け取ったら隣の人に「お先に頂戴します」というのね。など、真剣に茶道をされている方には申し訳無い位、うわべのスカスカな知識だけ頭に入れて、いざ参加。

とあるお茶室に、若い方からご年配の方までさまざまな方が集合、みなさん茶道をされているのか凛とした雰囲気が漂う中、一人明らかに素人な雰囲気を醸し出している私。

お茶室に通され、畳のヘリを踏まないようにぎこちなく歩き、言われた場所に正座。みなさん涼しい顔をされているなか、座って10秒で苦悶の表情を浮かべる私をよそに、ゲストのお客様がやっていらっしゃいました。青・黄・紫・赤・緑…色とりどりの着物をお召しになり、しとやかな佇まいで入室され次々と正座されて行きます。一瞬にして笑点を思い出し、音楽まで頭に流れ、どうしようかと思いましたが、場の空気と足の痛さにすぐにそんな煩悩は消え去り、アウェーなお茶会が開催しました。

お茶菓子の所作も勉強通り、完璧にこなしていると思っていました。しかし、手が汚れるからと、お茶菓子を懐紙に包んでそのままかぶりつこうとして隣をみると、皆さんお上品に手でちぎりながら頂いていました。やはり粗がでますね。その他、お茶を受け取った時に回す方向であたふた…。お茶碗を鑑賞する時に畳のヘリの向こう側に置いたまま鑑賞したりなど、さまざまなミスを犯してしまいましたが、その度にゲストの着物の方達が優しく接して下さり、とても暖かい会だなと感動しました。

東京オリンピック前に、我々日本人が日本の文化を改めて体験する事も大切なのではないかと考えさせられるいい機会でした。（久）